岩崎川のカワセミ

経営学部
矢田　博士

一、はじめに

筆者の住む愛知県日進市は名古屋市の東隣りに位置し、市を南北に二分するかのように天白川が東から西へと流れ、市の中心部あたりで北東から流れてくる岩崎川と合流する。その天白川と岩崎川とが合流するあたりは、護岸工事も最小限に押さえられ、川本来の自然な姿を比較的とどめており、川原や堤の斜面には葦やススキが生い茂り、カモやサギ、ヨシキリやセキレイなど、様々な野鳥の姿を目にすることができる。また、堤の上はちょっとしたウオーキングコースとなっており、このような川沿いの景色を楽しみながら歩くことができる。筆者もまた、四十も半ばとなり腹周りの脂肪もそろそろ気になりだしたので、新たな年を迎えたのを機に、思い立ってその道を散歩コースに選び歩くことにした。

歩き始めてからおよそ二ヶ月経った二月の下旬のこと、いつものように散歩に出かけ、岩崎川が天白川と合流するすこし手前にまで差し掛かったとき、太陽の光を浴びコバルトブルーの翼を輝かせながら、川の流れの中程を、水面すれすれに下流から上流へ真っ直ぐに、そしてあっという間に飛び去っていく一羽の鳥の姿を目にした。カワセミだった。こんなところにもいるのかと思いながら、なおも進んでいくと、今度は別のカワセミが川面に迫り出した枯木の枝に留まっていた。しばらく立ち止まって観察していると、魚の姿を見つけたのか、川面めがけて急降下し、水中にもぐったかと思うと、すぐさま飛び出してきて、またもとの枯木の枝に留まった。残念ながら魚は捕れなかったようだ。さらに二度ほど同じ行為を繰り返したものの、やはり魚を捕らえることはできず、とうとう諦めたのか、他の場所へ飛び去っていった。後から知ったことだが、カワセミは単に水浴びをするときにも同様の行為をするらしく、あるいはあのときのカワセミも単に水浴びをしていただけだったのかもしれない。

ところで中国の古典詩歌では、カワセミはどのように詠われているのであろうか。カワセミを詠った詩については、これまでことさらに取り上げて論じられたことはなかったように思われるので、これを機に確かめてみることにする。

二、カワセミの生態および習性

まずはその前に、カワセミの生態および習性について整理しておきたい。カワセミは一夫一妻で、非繁殖期には単独で行動するが、三月から八月にかけての繁殖期には、雄と雌とが共同で水辺の崖に嘴を使って50㎝から100㎝ほどの深い巣穴を掘り、そこで卵を産み、雛を育てる。抱卵と育雛もまた雌雄が交替で行うとのことである。主に川魚を餌とし、獲物を見つけると、水中に飛び込んで捕食する。捕らえた魚は、それを嘴に横にくわえたまま枝や杭に強く叩きつけて殺し、一息に頭から呑み込むのだそうだ。(1) この点については、明の李時珍の『本草綱目』巻四十七「禽部一・魚狗」の集解にも、「藏器曰く」として、

> 此即翠鳥也。穴土爲窠、大者名翠鳥、小者名魚狗。青色似翠、其尾可爲飾、亦有斑白者。俱能水上取魚。
> 《魚狗というのは翠鳥のことである。土に穴を掘って巣を作り、大きな種を翠鳥と呼び、小さな種を魚狗と呼んでいる。色は青緑色の玉のようで、その尾羽根は飾りとするのに相応しく、中には白い斑点模様があるものもいる。いずれの種も水上で魚を捕ることができる。》

とあり、続けて「時珍曰く」として、以下のようにある。

魚狗処処水涯有之。大如燕、喙尖而長、足紅而短。背毛翠色帯碧、翅毛黒色揚青、可飾女人首物。亦翡翠之類。
《魚狗は至るところの水辺にいる。燕ほどの大きさで、くちばしは尖っていて長く、足は赤色で短い。背中の毛は青緑色で深緑色を帯びており、翼の毛は黒色で青色に輝き、女性の髪飾りとするのに相応しい。これもまた翡翠の類である。》

さらに「魚狗」の項の末尾に「附録」として翡翠を取りあげ、「時珍曰く」として以下のように言う。

爾雅謂之鷸。出交広南越諸地、飲啄水側、穴居生子。亦巣于木。似魚狗稍大。
《『爾雅』には、この鳥を鷸と言う。南方の交州・広州・南越の諸地に棲息し、水辺で水を飲み魚を啄み、土手に穴を掘って巣を作り子を生む。また木に巣を作るものもいる。魚狗に似ていてやや大きい。》

『新註校定　國譯本草綱目（全十五冊）』（鈴木真海訳、木村康一ほか校定、春陽堂書店、一九七六年、第十一冊一九六頁）の「魚狗」の項の木村重氏の注によれば、中国のカワセミは日本のものと同種であるとのことで、さらに森岡弘之氏の補注によれば、中国には九種のカワセミが分布し、華北にはカワセミ・ヤマセミ、ヤマショウビンの三種が、他は華南に生息するとのことである。また、『世界鳥類大図鑑』（バードライフ・インターナショナル監修、山岸哲日本語版監修、ネコ・パブリッシング、二〇〇九年）によれば、カワセミ類の河川にすむ種は土手に長いトンネルを掘るが、他種は樹洞に営巣するとのことで、李時珍が言う通り、樹木に巣を作る種もあるようだ。

三、魚を捕らえるカワセミ

さて、カワセミの生態・習性の中で最も特徴的なものを挙げるとすれば、やはり水中めがけて急降下し魚を捕らえる捕食行為が第一に挙げられるのではないだろうか。唐宋の詩人たちも、やはりカワセミのそのような行為が印象的であったのであろう、好んでそれを詩に詠っている。(2) 例えば、唐の銭起の五言古詩に「藍田渓雑詠」と題する二十二首の連作の詩があり、その第十七首目の「銜魚翠鳥［魚を銜(ふく)む翠鳥］」と題する詩に以下のようにあるのは、その代表的な例と言えよう。

有意蓮葉間　意有り　蓮葉の間に
瞥然下高樹　瞥然(べつぜん)として高樹より下る
擘波得潜魚　波を擘(さ)きて潜魚を得れば
一点翠光去　一点　翠光　去る
《蓮の葉の間を泳ぐ魚に意識を集中し、ちらっと水面に目をやったかと思うと高い木から急降下。波を裂いて水中に潜む魚を捕らえると、あっという間に青緑色の翼を輝かせながら去っていった。》

また、唐の李紳の七言古詩「翡翠塢［翡翠の塢］」の一節にも、

翡翠飛飛繞蓮塢　翡翠　飛び飛びて　蓮塢を繞(めぐ)り
一啄嘉魚一鳴舞　一は嘉魚を啄みて　一は鳴き舞う
《雌雄のカワセミが飛び交い、蓮池の土手のあたりをめぐり、一羽は魚をくわえ、一羽は鳴きながら舞っている。》

とある。おそらく雌の気を惹こうと雄のカワセミが嘉魚を啄(ついば)み、その求愛行為に応えて雌のカワセミが鳴き舞っているのであろう。「塢」は土手の意。つがいとなったカワセミは、これからその土手のどこかに共同で巣穴を掘るのであろう。

さらに、唐の陸亀蒙の「翠碧」と題する七言絶句に、以下のように言う。

紅襟翠翰両参差　紅襟　翠翰　両(ふた)つながら参差(しんし)たり
径払煙華上細枝　径(ただ)ちに煙華を払いて細枝に上(のぼ)る
春水漸生魚易得　春水　漸(ようや)く生ずれば　魚得易からん
莫辞風雨坐多時　辞する莫かれ　風雨　坐(そぞ)

ろに多時なるを

《襟もとが紅く青緑色の羽毛の二羽のカワセミが離れたところにいる。そうかと思えば、すぐさま飛び立ち川霧の中を花を掠めるようにして細い枝に留まる。春になり川の水が徐々に増えてくれば、魚も捕りやすくなるであろう。ひたすら風が吹き雨が降り続いたとしても、嫌がるではないぞ。》

カワセミは、頭から背中にかけては光沢のある青緑色をしているが、目の後ろは橙色である。「紅襟翠翰」とあるのは、カワセミのそのような外観を表現したものかと思われる。また、転句に「魚易得」とあるように、この詩もまたカワセミの捕食に着目したものと言えよう。

春になり水かさが増えると魚が捕りやすくなる一方で、魚が水中深く潜ってしまうと、さすがのカワセミもなす術がなくなるのか、唐の許渾の五言律詩「渓亭二首・其一」の頷聯に、以下のように言う。

蝉響蟷螂急　　蝉　響けば　蟷螂　急に
魚深翡翠閑　　魚　深ければ　翡翠　閑なり

《セミの鳴き声が響くとカマキリは忙(せわ)しなくなり、魚が深く潜るとカワセミは暇になる。》

このようにカワセミを詠った詩には、その捕食行為に着目したものが多いことが確認されるであろう。そのほかにも、北宋の梅堯臣の五言古詩「依韻和太祝同諸君游園湖見寄［依韻　太祝の諸君と同(とも)に園湖に游び寄せらるるに和す］」の一節に、

不逢浮沼雁　　逢はず　沼に浮かぶの雁
但見銜魚翠　　但だ見る　魚を銜(ふく)むの翠

《沼に浮かぶ雁の姿は見えず、目にするのはただ魚をくわえるカワセミの姿だけ。》

とあり、南宋の陸游の七言律詩「小雨雲門渓上［小雨の雲門渓の上(ほとり)にて］」の頷聯に、

離黄穿樹語断続　　離黄　樹を穿ちて　語ること断続たり
翠碧銜魚飛去来　　翠碧　魚を銜みて　飛びて去来す

《コウライウグイスは樹の中をくぐり抜けるかのように枝から枝へと移り、その鳴き声は途切れたかと思うとまた聞こえてくる。カワセミは魚をくわえて、飛び去ってはまたやって来る。》

とある例などが挙げられる。

四、夫婦和合の象徴

ところで、巣作りから抱卵そして育雛までを、雌雄が共同して行うカワセミは、「鴛鴦（オシドリ）」と同様、夫婦の和合を象徴するものとして認識されていたようである。例えば、南朝梁の劉孝威の七言古詩「擬古応教」の一節に、夫との別居を余儀なくされている妻の悲哀を詠って、以下のように言う。

双棲翡翠両鴛鴦　　双棲の翡翠に　両の鴛鴦
巫雲洛月乍相望　　巫雲　洛月　乍(たちま)ち相い望む

《つがいのカワセミにつがいのオシドリ。私たちはと言えば、あなたは巫山の雲の下、私は洛水を照らす月の下、離ればなれで遠くから望み見るばかり。》

仲睦まじそうな雌雄のカワセミとオシドリの様子を目にし、夫と離ればなれとなっている現実に改めて気づかされるのである。

また、このようにカワセミは夫婦和合の象徴でもあることから、そうありたいと願う女性の思いを込めてであろう、その持ち物や寝室の調度品、例えば屏風の図柄として描かれたり、掛け布団や帷張(とばり)、下裳(もすそ)や帯などの模様として縫い取られたり、彩り鮮やかなその羽根は簪や簾(すだれ)の飾りなどに用いられたりしたようで、しばしば詩にも詠われている。例えば、旅に出たまま帰らぬ夫を独り待つ妻の思いを詠った唐の権徳輿の七言古詩「薄命篇」の一節に、

秋月空懸翡翠簾　　秋月に空しく懸く　翡翠

の簾を
春幃懶臥鴛鴦被　春幃に懶(ものう)く臥す　鴛鴦の被に
《秋の月が明るく輝く夜、独り寂しくカワセミの羽根で飾った簾(すだれ)を掛け、春の帷(とばり)で仕切られた部屋の中で、何をする気にもなれずオシドリを縫い取った布団にくるまる。》

とある。異空間を同時に照らす月は、離れた人と人とを結びつけるよすがとなる。簾を掛けて秋の月を遮るのは、月を見てしまうと夫のことが思い出されて、ますます悲しみが込み上げてくるからであろう。また、唐の白居易の七言古詩「長恨歌」の中で、寵愛していた楊貴妃を失った玄宗皇帝の悲しみを描いた一節に、

鴛鴦瓦冷霜華重　鴛鴦の瓦は冷やかにして霜華　重し
翡翠衾寒誰与共　翡翠の衾は寒くして　誰と共にせん
《オシドリ模様の瓦は冷たくて、降りた霜も重々しく、カワセミを縫い取った掛け布団は冷え冷えと、共にくるまる人もいない。》

とあり、唐の李商隠の「独居有懐［独居　懐(おも)う有り］」と題する独居の女性の孤独な思いを詠った五言排律の一節にも、

数急芙蓉帯　数(しば)しば急(きつ)くす　芙蓉の帯
頻抽翡翠簪　頻(しき)りに抽(ぬ)く　翡翠の簪
《ハスの花を描いた帯を何度もきつく締め直し、カワセミの羽根で飾った簪を頻りに抜いては挿し直す。》

とあるなど、こうした例はとりわけ「閨怨」[(3)]を主題とした詩を中心に数多く見られるようである。

五、おわりに

以上、岩崎川でカワセミの姿を目にしたのを機に、カワセミを詠った詩について眺めてみた。カワセミと言えば、急降下して水中に飛び込み、あの長く尖った嘴で魚を捕らえる捕食行為を、誰もが真っ先に思い浮かべるのではないかと思われるが、唐宋の詩においてもやはりその点に着目したものが多く見受けられた。また、それ以上に、カワセミは巣作りから抱卵そして育雛にいたるまで雌雄が共同して行うことから、夫婦和合の象徴とされ、女性の持ち物や寝室の調度品などを飾るものとして、「閨怨」の詩を中心に好んで詠われていることが確認できた。

ところで、学生の頃に住んでいた東京の川はどこも、川底から川岸にかけて、すべてコンクリートで固められていた。これではカワセミのあの長く尖った嘴をもってしても、巣穴を掘ることはできないであろう。筆者の住む日進市もここ数年で開発が一気に進み、山林は削られ道路となり、ため池は埋められ宅地と化した。せめて岩崎川のあの場所だけは、治水と称してコンクリートで固めてしまわないように、いつまでもカワセミが棲める川のままであってもらいたいものだ。

【注】
（１）『オンライン野鳥図鑑』のカワセミを参照。http://www.yachoo.org/Book/Show/394/kawasemi/
（２）ちなみに、『本草綱目』によれば、カワセミは「魚狗・魚虎・魚師」とも称されていたようで、李時珍の説明によれば、長く尖った嘴で魚を捕るカワセミは、魚を害する鳥であることから、狗（イヌ）・虎（トラ）・師（ライオン）など、獲物を咬む獣類の名を用いて名称としたとのことである。
（３）夫に棄てられた女性や帰らぬ夫を独り寝室で待ち続ける女性の悲哀を主題とした詩を言う。「閨」は、女性の寝室の意。